

付属資料

- 1 「全国ホームタウンサミット in 仙台」での協議を基にした提言
 - ① 総合型地域スポーツクラブをめざして
 - ② ベガルタウン活動の強化に関する提言
 - ③ サポート組織との連携に関する提言

- 2 「全国ホームタウンサミット in 仙台」分科会報告 (添付省略)
 - ① ホームタウンとまちづくり・Jリーグ
 - ② ボランティアとJリーグ
 - ③ 総合型地域スポーツクラブとJリーグ
 - ④ サポート組織とJリーグ

総合型地域スポーツクラブをめざして

○ はじめに

Jリーグ百年構想は次のように述べます。

「サッカーに限らず、あなたがやりたい競技を楽しめるスポーツクラブをつくること」をめざすと。

このことは、文部科学省が「スポーツ振興基本計画」を策定し、地方自治体を指導して総合型地域スポーツクラブの全自治体での発足を促していることと同趣旨のものがあるため、Jリーグクラブのある地域は、そのクラブがJリーグ百年構想をどのように実現させようとしているのか注目しています。

全国ホームタウンサミットでは、総合型地域スポーツクラブ（以下「総合型クラブ」といいます。）とJリーグの関わり方について検討しました。

その検討結果を基に、以下「ベガルタ仙台」として検討いただきたい事項を提言します。

○ 総合型クラブとはどんな形のことを想定しているのか

総合型クラブは、「住民の、住民による、住民のためのスポーツクラブ」という性格をもつものです。

したがって、理想的には多種目・多世代が理想としつつも、文部科学省が示すような、多種目、多世代等の目安を必ずしも満たすことは必要なく、地域の実情に応じたものでスタートして良いと考えます。

「ベガルタ仙台」の場合は、既に県内に1000名を超えるサッカースクール生を抱える等の実績があり、サッカーを核としたスポーツクラブづくりを行っていくことが第一段階であると考えます。

具体的イメージ例

- ・ 県内の主要場所にジュニアサッカースクールを展開し、なおかつ各校が簡易なクラブハウスをもちスクール生の父兄等が気軽に集える場を提供する。
- ・ クラブハウスの運営を含め、スクールの運営にも地域ボランティアの協力を得る。
- ・ 各校ごとの対抗戦（できればリーグ戦）を実施する。
- ・ 開校場所イメージ

仙台市各区、石巻市、古川市、築館町、迫町

富谷町、多賀城市、名取市、大河原町、白石市 等

○ 多世代プレイヤーへの対応

チームが真に地元で愛され、強固な経営基盤を築いていくためには、現状の観客で固定化されることは極めて危険なことです。

仙台スタジアムで観戦できる人だけでなく、テレビ観戦者でもベガルタ仙台に対する強い愛着心を持っていただけるようにすることが必要です。

クラブはユース世代の強化、ジュニアスクール運営の強化に加えて、幼少世代、シニア世代へも「ベガルタ」ブランドでの練習環境、試合環境を提供することにより、地元での支持拡大をめざすべきと考えます。

具体的イメージ例

- ・ ジュニアサッカースクールのクラブハウスを核に、Jリーグアカデミーを開催し、幼少世代がボールと遊ぶことからサッカーに親しませる。
- ・ 同様に、スクール単位でシニアサッカーチームを募集し、年配者へのスポーツ指導を行う。
- ・ 年配になってからサッカー・フットサルを始めた層に対して楽しむサッカーの指導を行う。

○ 総合型クラブの運営形態

総合型クラブの運営が、ベガルタ仙台の経営を圧迫することのないように、総合型クラブの運営は、トップチーム運営母体の現クラブとは切り離し、NPO法人として設立しなおし、設立時の各種補助金等を利用することが必要。

具体的イメージ例

- ・ 湘南ベルマーレが行っているNPO法人化が有効である。
- ・ 運営資金の基本は、所属会員の会費、スポーツ教室受託経費（仙台市・Jリーグから）とする
- ・ 加えて、NPO化することにより、補助金が得られやすくなる。
- ・ クラブハウスを新たに建設するのではなく、地域のスポーツ施設（プールや体育館等）の管理受託を積極的に行い、クラブの経営自立に役立たせる。
- ・ 平日日中帯は業務量が少ないことから、地域内の小中学校でのスポーツ科目にコーチ派遣を積極的に行う。
- ・ NPO法人の運営は市民後援会等の団体が当たることも可能。

○ 選手セカンドキャリアへの対応

総合型クラブの運営を強化することは、専門スタッフが必要になることにつながり、ベガルタ仙台を引退した選手の、セカンドキャリアを確保することが可能となります。トップチームで活躍した選手がコーチとなることは、チームと地域の距離を近くし、ベガルタ仙台を地域の人々に身近なチームとして認識していただくことが可能となり

ます。

具体的イメージ例

- ・ セカンドキャリアとして確保可能なポジション
トップチームコーチ、育成部（ユース）コーチ、普及部（ジュニアユース）スクールコーチ、フロント、オフィシャルショップマネージャー、総合型クラブマスター・コーチ
- ・ 上記セカンドキャリアで、40～50名程度のポストが確保でき、人事異動も可能となることから、モチベーションの維持も可能となる。

○ 多種目型スポーツクラブへの対応

現在、ベガルタ仙台主催として年間40回程度のスポーツ教室を開催しています。

地域にベガルタ仙台的認知度を高めるためには有効な手段だったと思いますが、地域の体育協会に運営を委託する方法では教室そのものが一過性のものであり、総合型クラブのめざすものとは方向性が違ってきます。

基本的には、上記のクラブハウスを基本に、年間を通じて継続的に支援もしくは運営できる他種目スポーツとの関係に絞り込むことが必要と考えます。

また、宮城県出身・在住の他種目トップアスリートの活動を支援する形で他種目スポーツとの関わりを持つ事も可能と考えます。

具体的イメージ例

- ・ スポーツ教室の事務局はクラブハウスにおき、参加者とのコミュニケーションを確保する。
- ・ 他種目スポーツの地域事務局をクラブハウスにおくことを認め、活動を支援する。
- ・ 射撃競技等の個人競技選手について、[ベガルタ仙台所属]という形をとり、その遠征費用を支援する代わりに、選手にはベガルタ仙台のユニフォーム着用等を義務付ける。
- ・ 所属選手を使ったスポーツ教室を定期開催する。

○ 女子サッカーへの対応

宮城県内の女子サッカーレベルは、YKKフラッパーズを頂点に、社会人及び学生ともハイレベルにあるといえます。

ベガルタ仙台が女子サッカーとの連携・支援を行うことは県内におけるサッカー文化の醸成に意義があるものと考えます。

具体的イメージ例

- ・ サッカースクールに女子部門を作る。
- ・ チームとして成人女子及びユース女子チームを保有する。

- ・ 女子トップチームの選手・コーチがスクールの指導を行う。
- ・ 県内の女子サッカーチームの指導を支援する。

○ まとめ

ベガルタ仙台が何故総合型クラブをめざす必要があるのか、それを再度確認しておきます。

- ・ サッカーだけでなく、他スポーツとも共存するスポーツ文化づくりが必要であること。(Jリーグ百年構想)
- ・ 観客を固定化させず、新たなベガルタ仙台ファンを獲得するためには、サッカー以外のスポーツ人口にもチャンネルを広げる必要があること。
- ・ スポーツを企業・学校のものではなく、「する・みる・支える・交わる」という観点から普及させていくために重要であること。

地域自治体及び財界の支援を受けて設立し、運営に沢山の市民が関わってきたベガルタ仙台であるからこそ、こうした必要性の具現化のために、積極的な取り組みが必要と思われます。

そのためには、まず明確なアクションプランを策定し、県民・市民に示すことが必要ですし、またプラン策定そのものも県民・市民と一体となって取り組むことが大切と考えます。

以上提言しますので、ぜひ検討いただきたいと思います。

ベガルタウン活動の強化に関する提言

～ホームタウン・まちづくりとJリーグ分科会・スタジアムアンケートから～

(はじめに)

Jリーグ百年構想には、「Jリーグ百年構想は、スポーツを核とした地域交流の場づくりであり、またこの理念をより多くの人と共有し、実現していこうという活動そのもの」と謳われている。東北ハンドレッド設立の経緯から見ても、幅広く地域の支援を募り、地域のスポーツ文化に貢献することは非常に重要である。2年間J1で戦ったベガルタ仙台は、地域にそして世界に情報や文化を発信するパワーをすでに持っており、そのことを深く認識しつつ、さらにその力を伸ばすことが地元への大きな貢献となる。

9月に開かれた第5回全国ホームタウンサミットにおいて、「ホームタウン・まちづくりとJリーグ」分科会が開催され、全国のJクラブにおけるホームタウン活動に関する報告と様々な議論が行われた。

ここではその分科会報告と11月に行われたスタジアムアンケートを元に、J1、J2に関わらず安定的な地元支援を実現し、ベガルタ仙台が地域の文化としてより一層受け入れられていくための方策として、ベガルタウン活動の強化を提言する。

なお重要なホームタウン活動である総合型スポーツクラブについては、別の提言に詳説しているのでごらんいただきたい。

(ホームタウンサミットでの議論)

2003年9月に仙台で行われた全国ホームタウンサミットでは、第一分科会として「ホームタウン・まちづくりとJリーグ」が催され、様々な議論が行われた。各クラブとも地元溶け込む様々な努力を行っており、支援団体はクラブによる地域活性化に取り組んでいる。そして、限られた予算と人員の中でいくつかのクラブでは成果を結びつつある。ここでは議論の一部を紹介する。

<様々な取り組み…交通計画>

- ・ スポーツを利用して地域の活性化につなげていけないかというのが最初の発想。シャトルバスの運行も始めた。乗客も増えつつある。
- ・ ○○交通が数分おきにシャトルバスを出している等コンフェデ杯で批判されたことを生かして、改善がなされた。

<戦略的な運営事例>

- ・ 2002年に招待券作戦を実施し、招待券は色を塗って着券率を調べた。着券率の良い地域に重点的に配布・販売して観客増につなげている。

<環境への取り組み>

- ・ 人が集まればゴミが増えるので、リユースカップ等の対策を考えている。
- ・ 2006年ドイツW杯は環境W杯と銘打っている。リユースカップの使用や太陽熱発電の

スタジアム、地下鉄のチケット付き入場券販売等が考えられている。環境に目を向けた取り組みは、一般的に認知されやすい。

<地元貢献への意識の高さ>

- ・ J 1 に限らず福島にも山形にも宮城にもチームがあるということになれば、地域の底上げにもあるし、地域の宝にもなる。
- ・ 120%クラブのために戦える選手という観点で選手を選ぶと、ファンサービスもきちんとできる選手がそろってくる。
- ・ ホームタウンや一般常識も教える講座を持ち、試合だけでなくホームタウン活動も+の査定にしようと考えているクラブもある。

<指導者の育成>

- ・ サッカーの指導者が不足している。現役を引退した人が教えてくれると、サッカーのレベルも上がるし、地域貢献にもなる。→スポーツ指導者の育成

分科会では、J リーグクラブは地域の起爆剤たる力を持っていることが改めて認識された。その力を伸ばし、チームの強化のみならず、地域のアイデンティティの確立や地域活性化につなげていくために行政や地域の諸団体と積極的な連携や、市民への情報公開と認知度向上への一層の取り組みの必要性が強調された。

また各 J クラブにはホームタウン推進にかかる業務部門が個別に設置され、行政との折衝、地域の商工会や市民との交流、さまざまな活動の試みなどを行っていることが示された。

(2003年スタジアムアンケートから)

ベガルタ仙台・市民後援会では毎年秋にスタジアムアンケートを実施しており、観客、交通、導入すべき施設など、ベガルタ仙台に関するさまざまな情報を蓄積している。2003年は11月の京都戦試合前に実施した。アンケート結果は別に添付するが、ここでは注目すべき情報を概観しておく。

<年齢層と観戦数>

観客の年齢については昨年まで20代の観客が多かったのだが、今年は30代が多くなっている。一方、毎回・ほぼ毎回試合を観戦する人が60%を越えている。逆に初めての観客が低下傾向にある。このことは若年層・観戦未経験者への魅力が薄れていることを示しているのではないか？

<交通問題>

自家用車の利用が多く、積年の問題が解決できていない。特に仙台市外や市内でも若林区など電車を利用しにくい地域では車の割合が高く、今後駐車問題や渋滞を解決するためにはクラブと行政、地域が一体となった対策が望まれる。

<家族連れ>

回答者の6割が家族連れである。今後とも子供にアピールできる企画や施設運営が望まれる。

また試合以外での子供へのアピール施策も考慮していく必要が高い。

<年間チケット>

年間チケットの割合は高くなっている。しかし来年は J2 で値段据置きという悪条件が加味される。年間チケット購入者に対する優遇策や配慮が望まれる。

<清掃ボランティア>

今回のアンケートではベガルタ・ボランティア・ネットワークからの質問として、来年度以降の清掃ボランティア導入の可能性についても質問した。その結果、4割もの観客が清掃ボランティアに協力する意向を示しており、スタジアムの環境への関心は高いことをうかがわせる。

<ベガルタの旗の下プロジェクトについて>

プロジェクト実施から 3 週間経過して認知が広まっているが、旗があれば協力したいという観客が多いことは注目に値する。今後、専用グッズの開発や旗の値下げにより、街にベガルタの旗・色がいっそう広まることを期待させる。ベガルタの色が広まることは、潜在的な需要を呼び起こす上で重要な要素となりうる。

<欲しい施設・グッズ>

施設については、市内中心部でのアンテナショップに関する要望が非常に多かった。また、クラブハウスでのグッズ販売を望む声も大きかった。欲しいグッズではアウェイ用レプリカ等の他、ベガルタのお菓子やカレンダーなどを望む声が高い。

(仙台の現状)

ベガルタ仙台では、スポーツ少年団やサッカー教室への選手派遣、ママさんバレー、ソフトテニスなどのスポーツ教室とコーチ派遣などを通して、地域のスポーツ文化に対して寄与してきた。

一方、市民後援会でも設立から 5 年を経て、さまざまな活動実績を積んでおり、関わってきた主な活動は以下の通りである。

- ・ 「街をベガルタ色に」活動（ポスター・ミニフラッグ配布）
- ・ 泉中央常設フラッグ掲示（2001 年度より）
- ・ ベガルタウンギャラリー設置（2003 年度新設）
- ・ クリーンベガルタ（2003 年度から 4 回実施）
- ・ 仙台スタジアム祭り（1999 年度から 4 回実施）
- ・ イベント参加（ストリート F・泉授産所・矯正展など）
- ・ 支部連動の活動（ベガルタの旗の下にプロジェクト、クラブハウス鍵開閉、花企画など）
- ・ その他（会報の発行・アンケート・サミットなど）

(今後に向けて)

ホームタウンサミットでの議論やスタジアムアンケートの結果などを受けて、今後ベガルタ

仙台がより深く地元へ根ざし、より幅広く支援を受けるためには、今後以下の点に留意する必要があると考えられる。

1. ベガルタ仙台の存在意義のアピール

ベガルタ仙台はその名前自身に PR 効果を持っていることを深く認識し、チームが存在することにより仙台が蒙る恩恵について積極的にアピールするべきである。そのために、クラブの地域貢献を強調したクラブコンセプト、中長期計画などを早急に策定し、逐次見直しを図ること、また、選手、スタッフ、後援会、ボランティアにいたるまでそのコンセプト等を徹底し、PR することが重要である。

2. クラブ側の地元連携に対する積極的な姿勢

これまでベガルタ仙台では、人員不足等により、ホームタウンを強く意識した施策は少なかったといえる。今後はクラブを挙げて積極的に街に出て、街の声を聞き、より一層顧客の意向を感じる事が重要である。また新しいファンを開拓するためにも、試合以外での地域貢献を模索するべきであるとする。

- ・ ホームタウン推進部の再設
- ・ クラブハウス担当の明確化
- ・ ベガルタウン活動の充実
- ・ 交通問題への積極的関与
- ・ 環境問題への先進的な取り組み
- ・ 選手ボランティアの派遣

3. 行政等外部諸団体との連携

ホームタウンサミットでは、ベガルタ仙台は行政との関係が比較的良好なクラブとして挙げられることが多かった。今後ともこの関係を維持・推進することが重要である。一方、ベガルタ仙台は、スポーツ少年団、体育協会などに選手・コーチを派遣し、スポーツ教室を催してきた。しかしこれらの教室は単発で、実施した団体や地域に対して十分なアフターケアを行ってきたわけではない。今後はこれらの団体・地域とも協力しながら、積極的に地域社会に貢献していくべきである。

- ・ 行政との一層の連携
- ・ サッカー協会との連携
- ・ スポーツ少年団との連携
- ・ 学校との連携

小項目に挙げた提案は、分科会及びアンケートの内容に市民後援会の経験を加味した具体的な活動内容についての提案であり、以下に詳説する。

(具体的な活動の提案)

☆ ホームタウン推進部の再設

今年泉区でベガルタウン活動を推進するに当たり、ハンドレッドと地元との連携の無さが話題になり、活動の障害にもなった。来年に向けて地元とのつながりを重視するという意味でも担当を設けてほしい。具体的な活動には、大口スポンサーではない地元企業に配慮し、協賛金をいただいたり、顧客サービスを充実するためのシステムを構築すること、「ベガルタの旗の下にプロジェクト」などを推進する上で、商工会や自治会、泉区との折衝に同席したり、プラン案と一緒に練ることなどが挙げられる。

☆ クラブハウス担当の明確化

今後クラブハウス管理を行うに当たり、クラブハウス交流スペースがクラブとチーム、ファンが交わる極めて重要な場所であることを認識し、有効活用するためにクラブとして積極関与してほしい。また、管理する上での安全面、金銭面、企画面での責任の所在、役割を早急に確認し、意識統一の場を設けてほしい。さらに、短期、長期の活用計画について市民後援会を含む関係各団体と協議し、運営方針を示すべきである。交流スペースの活用の一例としては、グッズ販売を行うこと、ビデオ等を設置しサービスの充実を図ること、サポーター意見箱を作り常時情報収集に努めること等が挙げられる。

☆ ベガルタウン活動の充実支援

後援会が続けてきたベガルタウン活動は、泉区支部結成、ベガルタの旗の下にプロジェクトの成功などにより活発化している。しかしクラブの関与は小さく、商工会などの地域団体からも「クラブに協力したいのだが、どこに話を持っていけばいいのかわからない」等の要望をいただいている。2004 年度以降の戦略的展開を狙い、クラブ・後援会などが連携して取り組む必要がある。

- ・ 活動地域の拡大…泉中央から常設フラッグ・試合日フラッグ掲示などを面的に展開する。またクラブハウス～泉中央にかけてベガルタロードを創設し、周辺の整備を行政と協働で行うと共に、フラッグ掲示等ソフト面の整備を地域に働きかける。またサッカースクールや市民後援会支部の存在する地域を中心に、それぞれの地域の特色を生かした普及策を講じる（例：べがる田など）
- ・ 駅前アンテナショップ・交流スペースの創設など仙台市中心部への積極的展開
- ・ 花企画の開始…市民参加型企画として、スポンサーや泉地域の業者とも連携しベガルタのイメージアップとファン層拡大を目指す。地域通貨等を活用し、学生・高齢者の力を利用して地域の活性化策ともなりうると考えている。
- ・ 地元商品とのタイアップ…各地から訪れるファンにとって、地元独自の商品は非常に魅力的である。また地元商品にとっては貴重な PR の場となりうる。グッズ販売資格等の制限があることは承知しているが、地元との協調姿勢を示すためにもあらゆる方法を模索すべ

きである。

- ・ 県内各市町村の関連グッズの販売と PR 企画…今後広くベガルタが県内にファンを拡大するためにも県内市町村との協力は欠かすことができない。各試合日を〇〇町 PR デーなどと銘打ち、各町の物産を販売したり、泉中央商店等と協働でフェアを行ったりすることによって県内の盛り上げを演出するとともに、付近の活性化を図るべきである。

☆ 交通問題への積極的関与

ベガルタの創設当初から、公共交通機関利用者の増加、スタジアム付近の違法駐車解消などは地元からの要望に上がっている。抜本的解決に向けて、

- ・ シャトルバスの運行
 - ・ 地下鉄、バスとの割引チケット
 - ・ 商店との駐車券付チケット
- などに取り組む必要があると考える。

☆ 環境問題への先進的な取り組み

2002年からはみやぎ環境と暮らしネットワーク（MELON）とボランティアとのタイアップにより、ゴミ減量やスタジアム周辺の清掃などを行っており、Jクラブや事務局から非常に注目されている。また、2006年W杯は環境を重視したW杯になるとも言われている。クラブとしてもスタジアム及び地域の環境問題に積極的に取り組み、その姿勢をPRすべきである。また清掃活動などに選手ボランティアを派遣すべきである。

☆ 選手ボランティアの実践

先進的なJリーグのクラブに学び、選手教育、地元普及の両面から積極実施すべきである。

☆ 行政との一層の連携

現在もホームタウン協議会を運営する仙台市とは、他のJクラブに比べても密接な関係にはあるが、今後一層連携し、練習場やクラブハウスの運用改善、地元との連携、総合型スポーツクラブへの取り組み・支援などを行う必要がある。

☆ サッカー協会との連携

宮城県サッカー協会はJリーグを含むサッカー全般を統括する唯一の組織であり、その役割はきわめて大きい。しかしながら現状ではベガルタの試合時に別なイベントが組まれるなど、連携を密にすることによって改善できるのではないかと考えられる点もある。また、宮城県が誇る女子サッカーの一層の発展や、総合型スポーツクラブの展開、芝生グラウンドの普及など、協調して推進すべき点も多い。ベガルタが地域に深く根ざした活動を展開する上で、協議の場を定期的に設け、サッカー文化の定着に向けて積極的に連携すべきである。

る。

☆ スポーツ少年団との連携

幼年期、少年期の指導は、有力なプレーヤー養成に非常に重要である。現在行われている冠大会などに加え、通常時のベガルタジュニアユースとの練習試合など、対戦機会をできるだけ増やし、相互交流を育むべきである。ベガルタが蓄積しつつあるノウハウを県内のスポーツ少年団に積極的に提供するなど、一層の交流を図るべきである。

☆ 学校との連携

学校と連携することは今後のベガルタの発展のみならず、青少年の健全な育成の観点からも重要である。体育の授業等でのサッカー指導だけではなく、広く健康（ストレッチやスポーツ医学など）・食（栄養学など）・環境分野等の総合学習の際に、ベガルタが提供できる知識は多いはずである。放課後の活用ひいては地域の総合型クラブ設立などについて、ベガルタは積極的に関与するべきであると考ええる。また J リーグ百年構想にも謳われている芝生グラウンドの普及について、学校と連携し取り組むことも重要である。短期的にも現在開催されていない中学生の冠大会の開催など取り組むべき点は多いと考える。

（終わりに）

J1 から J2 に降格したことで、クラブが地元で根ざしているかどうかを試されることとなった。いまこそ、何を提供すればお客様に満足していただけるか、地元とともにクラブが育つには何が必要かを考え、早急にクラブコンセプト、長期計画、中期計画等の目標を定め、行動する必要がある。

ベガルタ仙台・市民後援会としても、現在まで積み上げた人脈、交流、経験などを最大限に生かし、クラブとともに成長する決意である。

ベガルタ仙台が世界に誇るクラブとなるために、クラブ・市民後援会・県民・市民が一体となって取り組むために、上記の提案を一つでも多く、少しでも早く、実行に移されることを希望する。

サポート組織との連携に関する提言

○はじめに

この提言で取り上げるサポート組織とは、市民後援会やVVNのようなパートナーだけでなく、ファン・サポーター、市民・県民、経済界、マスコミなど、地元で支援する人々を指すとしています。

今年9月開催した全国ホームタウンサミットでは、サポート組織とJリーグの関わり方について検討しました。

その検討結果を基に、以下「ベガルタ仙台」としてサポート組織との連携について検討いただきたい事項を提言いたします。

○情報開示の必要性

クラブの情報はファン・サポーターや市民・県民に開示すべきであると考えます。この情報開示とは、「7つの提言」6 情報公開の徹底 の項でも述べているように、経営状況等についてサポーターや市民・県民が知りたい時にアクセスできるよう公式HPへの掲載をご検討頂きたいというものです。また、HPだけに限らず、サポーターとの意見交換の場でもよいと考えます。

甲府は以前、存続の危機に際して、経営状態を市民に対してオープンにしました。そのことによって、サポーター・市民は初めてクラブが危機的な状態であることを認識し、それ以降支援の動きが広まりました。以前は入場者が3,000人に達するかどうかでしたが、今年は平均で5,796人にまで増えています。これは、情報開示により、市民－経済界－クラブが「三位一体」となるきっかけになったよい例と考えています。

○地元マスコミとの連携強化

地域の盛り上げには地元メディアに取り上げてもらうことが必要であると考えています。そのためにもクラブは、地元メディアとのよい関係を築く努力をするべきであると考えます。

J1の時はメディア側から取り上げることがあったと思うのですが、J2ではメディア側から取り上げてくれるのを待っているだけでは露出度がJ1に比べると少ないことは経験済みのことだと思います。

マスコミに取り上げてもらい露出度を上げる効果はもちろんのこと、よい記事を書いてもらうことによりクラブのイメージアップにもつながっていくと思います。

時には、クラブ側からメディアを利用する場面も出てくることもありえると考えます。そのためにも地元マスコミとクラブとのよい関係を築いておくことが必要と考えます。「7つの提言」4 業務運営体制の整備でも同様のことを述べていますが、運営体制からご検討頂きたいと思います。

○サッカー以外のスポーツとの取り組み

総合型地域スポーツクラブと関わりがありますが、長期的に見ればサッカー以外のスポーツとの関係を持つておくことは重要です。

日本では、プロスポーツといえば野球が人気や知名度や集客で1番のスポーツです。一方、昨今の世界大会で、日本からトップクラスの選手が水泳、体操、女子マラソン、男子短距離などさまざまなスポーツから出てきています。スポーツの価値観が変わり、世界で戦える個人スポーツが台頭してきている状況を見ることができます。このような状況をみて、サッカーだけでは危ないとJリーグも考えているようです。

磐田では、

- ・サッカーだけでは今後先細りになるという危機感を持っている
- ・ラグビーとのコラボレーションにより新しい分野の開拓を目指している

という動きをしています。

この他、JリーグではFC東京と協力してバレーボールを行っているようです。

取り組み方としては、現在ベガルタ仙台で行っているサッカー以外のスポーツ教室をより充実させていく手法が考えられます。詳しくは、『総合型地域スポーツクラブを目指して』多項目型スポーツクラブへの対応に述べられています。

このようにサッカー以外のスポーツを取り込むことにより、支援してくれる組織がサッカー以外に拡大していくことを期待しています。また、即効的ではないかもしれませんが、ベガルタ仙台を知るきっかけとなり、集客力やグッズ収入にも関わってくることが予想されます。ファン層の拡大という見方もできますので、検討頂きたいと思います。

○まとめ

このサポート組織との連携の提言では、ファン・サポーター・ベガルタ仙台に関心のある市民・県民に対しての情報開示、地元マスコミとの連携、現在ベガルタ仙台に対して関心はないがスポーツに対して関わっている人たちの取り組みについて述べています。いろんな分野の「サポート組織」を対象としたものとしています。

ホームタウンサミットでは、事前に各クラブに対してアンケートをとりました。その中

の回答に湘南から次のようなコメントが寄せられました

“活動に十分な人数を確保していただき、個々の負担が大きくなりすぎないようにしてほしい。「気軽に楽しくサポートする」スタンスがありがたい。そこからクラブとサポート組織の自然な信頼関係が構築されると考えています。”

「気軽に楽しくサポートする」スタンスから、クラブとサポート組織の自然な信頼関係が構築されると考えているこの湘南の回答はホームタウンサミット分科会参加者にとって非常に参考になったという意見が聞かれました。

両者の自然な信頼関係構築のためにも、クラブとサポート組織が『相互理解』しあえることが必要と考えており、この提言の根底をなすものであると考えています。

是非ご検討頂きたいと思います。

#なお、今回の提言には経済界からの考えが述べられておりません。今後検討していきたいと考えております。